人と文献の交差点
－経資協との深い思い出－

鈴　木　伸　介
（元東京経済大学図書館）

29年間の在職中、25年近くは経済資料協議会と係わっていたのではないかと思う。所属大学が経済学部を抱えている以上、図書館の力量はともかくも、所謂「文献季報」のデータ採録は季節労働として継続せざるを得なかった。

しかしこの「採録を継続する」ということが、実は重要だったのである。始めは渋々やっていたこの作業を通して、担当採録誌に精通するだけではなく、著作者である国公私立大学・短大の教員の認知域が格段に広がったのである。整理作業などではその効果は今ひとつだが、参考業務などレファレンス作業で、卒論や修論作成の学生・院生、あるいは教員とのやり取りが始まると効果は出てくるのである。更に言えば、論文の中に件名項目を探し出す作業を通じて、論文の各章立てを含めざっと眺める訓練を継続することで、特定学問領域にまで足を踏み入れ、学問体系や専門語にもアレルギーを伴うことなく理解出来るようになっていたのである。普段触れることの無い、証券市場の領域などは、時代の趨勢ということもあり、参考業務などでは大いに助かったものである。

理事校・幹事校などを勤めながらも、毎年各地で行われた総会や、時折行われる文献研究会の如きものは何時も楽しかった。福島大学が会場だった時には、作家広津和郎が係わり大きく裁判が変化した、あの松川事件の現場を訪ねたり、かつて外国人居留地だった築地界隈を散策し、昨今、医師の日野原重明さんで著名な聖路加病院内のチャペルを訪ねたり、歌に歌われた銀座の柳を銀座育ちの一橋の細谷さんにご案内いただいたり、京都では現理事長を勤める櫻田さんに夜の祇園を案内していただき、後学のために？一見さんの入店出来ないお茶屋

の二階に上がらせてもらったこともある。

往事茫々の感があるが、人と文献の交差点での出来事は、どれを取っても人生上の貴重な思い出である。経済資料協議会の終焉まで、生きて遭遇出来たことを良しとしたいものである。係わったすべての方々に感謝の言葉を捧げたい。

思い出すままに

鈴　木　よ志子
(元アジア経済研究所図書館)

私が直接「経済資料協議会」と関わりを持つようになったのは職場の担当課に配属されてからである。職場独自の雑誌記事索引の作成と重なる部分もあったが、「経済学文献季報」は経済学の分野では、なんといっても多機関の共同作業ということと編集の確かさで内容も幅と厚みがあり、信頼性を得ていた。1980年代後半、一時休刊の時期から復刊についてのご苦労は先輩からよく聞かされていたものだ。現実に実務として、自分が担当するまでは、見学会などの行事に参加するだけで、協議会そのものには、あまり関心はなかった。諸先輩が理事機関としての役割を果たしていたので、その後任ということで理事になったりして、何年間かお世話になった。私が参加する以前は休刊問題と同時に、国立大学などでは行政改革の影響で図書館専門担当者の異動などとも関わって、会員機関が減少して、会員拡大に苦労されていたようだ。共同作業と組織の持続は永遠の課題だ。その後、1990年代後半に入り、官民問わず、ますますこのような共同作業的事業がやりにくくなってきたのだ。物事を起こすときの努力と引き際の辛さ・困難さは別問題であるが、いよいよ2008年10月で解散とのこと、本当に皆様お疲れさまでした。